

序

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2013-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 根本, 美作子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/13945

序

根本 美作子

ポスト・コロニアル研究全盛期以降、フランス語文化圏 francophonie はある種のモード現象とまで化した。しかし、そうした時代の熱も落ち着きつつあるいま、こうしてフランス語圏文学についての特集を組むにあたって重要に思われたのは、日本という世界の一地域から、この問題を広く把握し直すことだった。

そこで今回はフランス語文化圏をその狭義（政治的意味）においてではなく、文字どおりに捉えたいと思う。とくに「francophonie 文学」というと、近年では、いわゆる王道のフランス文学（パリの文壇という狭いエリート社会にリードされる）ではない文学を意味することが多く、差別化の機能をもつ表現になってしまっているという現状もある。日本では、大学における文学部の人気の低下に歯止めをかける策として、フランス文学やフランス文化といったようなオーソドックスな名称を捨てて、フランス語文化圏を冠する新しい名称に切り替える大学などもあり、それはそれで、広い世界観を提案する評価すべき試みでありうるとはいえ、「フランス語文化圏」という表現が大きな問題を孕んだ、幾重にも折り重なった意味内容をもつ概念であることを忘れてはならないだろう。

この文脈で重要なのは、2007年に40名余りの作家が共同で『ル・モンド』紙に発表した声明文（マニフェスト）『「世界 = 文学 littérature-monde」のために』であり、「フランス語文化圏文学」という表現にまつわる諸問題を指摘している。そこでの主張によれば、francophonie 文学という呼称は、字義どおりにはフランス語で書かれたすべての文学を指しているはずであるのに、実際には、フランス語を母語とする作家と母語としない作家という（きわめて曖昧な）区別を前提として差別化を行なう概念である。その上にさらに売り上げや知名度、そしておそらくは白人といった経済的・政治的な尺度がかぶさり、たとえばアイルランド人のベケットやスペイン人のホルヘ・センブルンは、母語がフランス語でないにもかかわらず、「フランス文学」

として括られ、いっぽう旧植民地出身の作家たちは「フランス語文化圏文学」に分類される。そうした現状に対して、このマニフェストは明確に抗議するものである。

そこで本特集では francophonie 文学をその本来の、文字どおりの意味で捉え直し、「いわゆるフランス語文化圏文学」だけではなく、「いわゆるフランス文学」に分類される作家や作品、文化現象に対する論文もここに含めることにした。それ以外にも、フランス語で書かれた作品や思想を既存の枠組みを超えて、できるだけ広く捉えるさまざまな試みを盛り込んだつもりである。たとえば、francophone から見た東京に関する論文を紹介することによって、フランス語文化と日本語文化の関係を考え直すきっかけとすると同時に、イヨネスコやシオランといった「フランス文学」の有名な作家を輩出したルーマニアをフランス語文化圏として捉え直し、同国のフランス文学者に寄稿を依頼した。また、フランス語文化圏の背後に横たわるより広大なロマンス語文化圏を視野に入れる訓練の一端として、イタリア文学に関する論文もお願いした。

そのほかにも、まったく別の角度から、世界各国のいわゆるリセ・フランセの卒業生たちにも今回は焦点を当ててみた。フランス国外において、フランス語による教育を施す公的機関はリセ・フランセ Lycée français と呼ばれる。これは「フランス人学校」ではなく「フランス学校」とでも訳すべきだろう。このシステムを大々的に取り上げたフランスで初めての本、ナディーヌ・ヴァスールの『フランス語の授業』が目指しているように、リセ・フランセはフランス人だけではなく、多くの外国人を迎え入れてきたからである。この本の中で紹介されている 2008 年度のゴンクール賞（フランスでもっとも権威ある文学賞）を受賞したアフガニスタン出身のアティク・ライミや、漫画『ペルセポリス』で世界的な名声を獲得したイラン出身のマルジャーヌ・サトラピは、リセ・フランセの卒業生である。本特集に訳出したライミの証言を読むことによって、「世界 = 文学」マニフェストが謳い上げているような、フランス語文化圏の「世界」としての広がりや理解することが少しでもできればと思う。

従来 of francophonie 文学は、脱植民地化した国の作家の、エキゾチックなイメージを前提とするのが通常だった。これが現在、「フランス語文化圏文学」に分類される作家たちがもっとも抵抗する部分だろう。こうした前提は、創造の源泉であるイメージを国や文化のボーダーラインに押し

込め、たとえばヴェトナム出身の作家のノルマンディ地方を舞台とした作品を認めないからである。「フランス出身」の作家が、ヴェトナムを舞台にした作品を書くことにはもちろんいかなる問題も見出されないという事実と照らしあわせたと、こうした差別化は暴力以外のなにものでもないだろう。

こうしたイメージの占有を皮肉ることによって換骨奪胎した作品が、ハイチ出身の「アメリカの作家」、ダニー・ラフェリエールの『ぼくは日本人作家だ』(2008)であるだろう。独裁政権下のハイチを逃れ、モントリオールに渡り、そこでさまざまな職業に就いた後に作家として1985年にデビューしたダニー・ラフェリエールは、その後マイアミでしばらく暮らしたのち、再びモントリオールに移住している。ハイチをいくども再訪しながら北米生活をつづけるなかで、ダニー・ラフェリエールは自伝的な要素の多い作品をその後発表しつづけるが、その最初の九作を「アメリカの自伝」と名付けている。フランスと、フランスが強いてくるフランス文学とフランス語圏文学の力関係への抵抗として、きわめて興味深い試みである。今回は『ぼくは日本人作家だ』の冒頭部分と、2009年のメディシス賞を受賞した『帰還の謎』の最初の三章を訳出してみた。

このほかにも国内のさまざまな分野の方々から、「いわゆるフランス文学」や「いわゆるフランス語圏文学」に関する興味深い論考・作品を寄せていただいた。フランス語を軸に繰り広げられる「フランス語圏文学」の多様性を味わっていただければと思う。